

コリント人への手紙第一11章31節 「自分をわきまえる」

1A 自分をわきまえることの難しさ

1B 自分をわきまえ知ることの辛さ

1C 思い上がった見方

2C 心の邪悪さ

3C 傷ついた道

2B 試される主

1C イスラエルの荒野の旅

2C ペテロの心

3C 七つの教会

4C あまりにも高い知識

2A 自分をわきまえることの大切さ

1B 罪を隠すことによる渴き

2B 罪を告白したことによる交わり

3A 神による裁き

1B 裁きの日

2B 神に知られている自分

3B 御前に大胆に立つ自分

本文

コリント人への手紙第一の 11 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが、10 章まで来ていますが、午後礼拝で、ここ 11 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、31 節に注目します。「**しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。**」使徒パウロは、11 章で、コリントの教会で起こっている問題、主の晩餐を、その意味していることをきちんとわきまえないで食べている問題を取り上げています。主のからだを表すパン、その流された血を表すぶどう酒ですが、その主のからだをわきまえないで食べていました。それで、目に見える形で主による裁きがありました。弱い者や病人が多く、死んだ者たちもかなりいたとのこと。罪が赦され、霊肉のいやしを約束されている主の晩餐が、わきまえないで食べていたので、裁かれたのです。

そこで、「**しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。**」と言っています。ここの「わきまえる」という言葉は、訳によっては「さばくなら」となっています。大事なのは、ここのギリシア語は、「よく調べて、客観的な判断をする」というような意味です。自分を責めるということではありません。「ロマ 8:1 今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」とあるとおりです。そうではなく、正直に自分を見る、有体に見るということです。そうする

ことによって、主の前に、そのままの自分を持っていくことが可能になり、それで、主の豊かな恵みと憐れみにあずかることができるのです。

1A 自分をわきまえることの難しさ

けれども、自分をわきまえるということほど、難しいものではありません。ギリシアの哲学者ソクラテスは、「汝自身を知れ」と言いました。しかし、どれほど自分自身で自分を知ることができるでしょうか？実は、自分が自分を知っていると思っけていても、偽って見ていることが多いからです。

1B 自分をわきまえ知ることの辛さ

1C 思い上がった見方

パウロは、ロマ書でこう言いました。「12:3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたが一人ひとりに言います。思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい。」思うべき限度を超えて思い上がる、ということ、私たちはどうしても行ってしまいます。これは、自分ではできるのだというぬぼれに限りません。次に、各人の賜物が与えられていることをパウロが話しますが、主が恵みによって立たせておられることを否んで、自分ではできなるとすることも思い上がりです。自分を、神の恵みによって見ていくことは、本当に難しいです。

2C 心の邪悪さ

なぜかという、私たちの心に、アダムから受け継いだ罪があるからで、自分で自分を正しく見ることさえできなくされているからです。エレミヤ書にこう書いてあります。「17:9 人の心は何よりもねじ曲がっている。それは癒やしがたい。だれが、それを知り尽くすことができるだろうか。」心がねじ曲がっている、それを知り尽くすことができなくなっているのです。

依存症の問題について、よく言われるのは、「依存症であることを気づかない、いや認めない」ということにあると言われています。厚生労働省のサイトに、こうありました。「ほとんどの場合、依存症の当事者は、自分は依存症だと気づくことはできません。そのため、明らかに問題がある状態であっても、やめようと思えばやめられる、あの人に比べたら大丈夫という発言をし、その問題に向き合えないケースが多いとされています。」¹これは医学的なことで、あくまでも喩えです。霊的にも、同じことが言えるということです。自分自身をわきまえ知ることができていないので、それで自分では何とかできると思っけてしまいます。上からの助けを求めることがないのです。

3C 傷ついた道

そこで私たちは、自分をわきまえるのに必要なことがあります。それは、主が自分のありのままの姿を知っておられるということです。主が、自分の心のあり方を教えてくださいと願ひ、祈ること

¹ <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000149274.html>

です。詩篇の交読文で読んだところ、139 篇の最後で、ダビデがこう祈っています。「139:23 神よ私を探り私の心を知ってください。私を調べ私の思い煩いを知ってください。」私の心を探ってください、知ってくださいと祈っています。

そして続けてこう祈りました。「139:24 私のうちに傷のついた道があるかないかを見て私をとこしえの道に導いてください。」傷ついた道といっています。そうです、自分のありのままの姿を見ることは、辛いです。そこには、罪による苦しみがあります。罪のよる傷があります。

2B 試される主

しかし主は、私たちが自分をわきまえることによって、初めて、主により頼み、私たちが恵みの中に入れることを知っておられます。それで、私たちの心を試されます。

1C イスラエルの荒野の旅

モーセが、イスラエルの民に、荒野の旅を思い出させてこう言いました。「申 8:2 あなたの神、【主】がこの四十年の間、荒野であなたを歩ませられたすべての道を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試し、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。」主は、私たちの心が主の命令に従うのかどうかを確かなものにしたいと願われて、それで試みられることがあります。前回の学び、試練の目的です。そうでなければ、イスラエルの民が本当に、真実な神の民なのかどうか分かりません。

2C ペテロの心

イエス様が、ペテロに言われたことを思い出します。主の最後の弟子たちとの食事で、「マルコ 14:27 あなたがたはみな、つまずきます。」と言われましたが、ペテロは、「14:29 たとえ皆がつまずいても、私はつまずきません。」と言いました。けれどもイエス様は、「14:30 まことに、あなたに言います。まさに今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います。」と言われました。ペテロは、「たとえ、一緒に死ななければならぬとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」と答えました(14:31)。ペテロは、自分の心のうちにあるものが何であるかを知るために、主は、このような試みをお許しになったのです。

3C 七つの教会

そして主は、終わりの日に教会を裁かれます。裁くといっても罪に定めることではなく、一つ一つの教会にあるものを明るみに出すということです。黙示録の七つの教会のそれぞれに、「わたしは、あなたの行いを知っている。」と言われていました。その目は燃える炎のようになっていて、その目で教会にあるものを見ておられます。

ラオディキアにある教会が、自分自身の見る姿と、イエス様の見るそれとが大きくかけ離れてい

るのを認めることができます。「黙 3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっている。」自分たちは富んでいると思っていたのに、実はみじめで、哀れで、盲目で、裸だという、これほどの違いがありました。

4C あまりにも高い知識

これほどの違いが出てくるのは、私たちが自分のことを知っている知識に対して、神の自分に対する知識が圧倒的に大きいということがあります。詩篇 139 篇のことを思い出しましょう。「139:1-6 【主】よあなたは私を探り知っておられます。2 あなたは私の座るのも立つのも知っておられ遠くから私の思いを読み取られます。3 あなたは私が歩くのも伏すのも見守り私の道のすべてを知り抜いておられます。4 ことばが私の舌にのぼる前になんと【主】よあなたはそのすべてを知っておられます。5 あなたは前からうしろから私を取り囲み御手を私の上に置かれました。6 そのような知識は私にとってあまりにも不思議あまりにも高く及びもつきません。」あまりにも不思議で、高く及びもつかない、とダビデは圧倒されています。さらに、自分が胎児であるときに、なんと 16 節によりますと、「あなたの書物にすべてが記されました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。」ということなのです。

2A 自分をわきまえることの大切さ

私たちは、自分がどのような姿なのかをわきまえることによって、初めて神の救いの喜びを得ることができます。

1B 罪を隠すことによる渴き

詩篇 32 篇で、同じダビデが罪を隠していたことを彼が述懐しています。バテ・シェバと姦淫の罪を犯し、それから彼女の夫ウリヤを殺した罪のことです。それを友人であり、預言者であるナタンに指摘され、罪を告白したら主に赦していただいたことを歌っています。「32:1-5 幸いなことよその背きを赦され罪をおおわれた人は。2 幸いなことよ【主】が咎をお認めにならずその霊に欺きがない人は。3 私が黙っていたとき私の骨は疲れきり私は一日中うめきました。4 昼も夜も御手が私の上に重くのしかかり骨の髄さえ夏の日照りで乾ききったからです。セラ 5 私は自分の罪をあなたに知らせ自分の咎を隠しませんでした。私は言いました。「私の背きを【主】に告白しよう」と。するとあなたは私の罪のところがめを赦してくださいました。セラ」罪を隠している時は、自分の骨が夏の日照りのときのように乾ききっていたのです。自分のことをわきまえていないというのは、こうなってしまうことです。しかし、わきまえたら、赦されて、救いの喜びを取り戻すことができます。

2B 罪を告白したことによる交わり

使徒ヨハネが、第一の手紙でこのことを話しましたね。「1:4 これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。」とのことですが、喜びが満ちあふれるのは、罪をありのまま

に言い表すことによってです。続けて読むと、神は光で、光の中を歩んでいるから、神と交わりを持つことができます。そして8節と9節です。「8 もし自分には罪がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」自分をわきまえていないと、そこには偽りがあり、真理がありません。けれども、罪を告白するなら、神は罪を赦し、私たちを不義からきよめ、その交わりを回復してくださいます。それで、喜びがみちあふれるのです。

3A 神による裁き

そこで本文に戻りましょう。「しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。」と言っています。

1B 裁きの日

私たちは、自分のことを偽ってしまうだけでなく、神のことを偽り者にしてしまう傾向も持っています。それは、神は裁かれると言われているのに、裁かれていないではないかと悔ってしまうということです。

ペテロが第二の手紙で、この問題について話しています。「Ⅱペテ3:3-4 まず第一に、心得ておきなさい。終わりの時に、嘲る者たちが現れて嘲り、自分たちの欲望に従いながら、4 こう言います。「彼の来臨の約束はどこにあるのか。父たちが眠りについた後も、すべてが創造のはじめからのままではないか。」」創造のはじめから、何も変わっていないとしていますが、ノアの時代に洪水、水の裁きがあったことを忘れています。そして、「3:7 しかし、今ある天と地は、同じみことばによって、火で焼かれるために取っておかれ、不敬虔な者たちのさばきと滅びの日まで保たれているのです。」と言っています。なぜ、その裁きがないように見えるのか？その理由をペテロは、神の忍耐であること話しています。「Ⅱペテ 3:9 主は、ある人たちが遅れていると知っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」人々が悔い改めに進むように、神は忍耐しておられるのです。

しかし、その忍耐を、「神は見えていない」と思い込む罪があります。また、その忍耐を「神は知らないのだ」と、知ることはできていないと欺くことがあります。もっとひどいのは、「神はこれを是認しておられるのだ。これでいいのだよ、と言っているのだ。」と思い上がることさえあるのです。あるいは、「神は裁く力などないのだ。」とみなします。しかし、主が戻って来られたら、必ず裁かれるのです。アテネにいる人々に、パウロが宣言しました。「使 17:30-31 神はそのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今はどこでも、すべての人に悔い改めを命じておられます。31 なぜなら、神は日を定めて、お立てになった一人の方により、義をもってこの世界をさばこうとしておられ

るからです。神はこの方を死者の中からよみがえらせて、その確証をすべての人にお与えになったのです。」

2B 神に知られている自分

しかし、自分が知っている自分に立つことなく、神に知られている自分である時に、主は豊かな恵みを施してくださるのです。「ヤコブ 4:6 神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる」と。それで、こう言われています。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。」

どうしても自分は、いや悪魔は、その逆、嘘を私たちに言い含めます。自分のありのままの姿を神が知ってしまったら、神は怒るであろう。ただで済まないであろう。このことそのものが愚かです。神にはすべてが初めから知られているのです。そして、もっと愚かなのは、神の憐れみ豊かさ、恵み深さを疑うことです。私たちが、自分に示された罪、欠けたところ、曲がったところ、不義を言い表したら、神はこれとぞばかり罰するということは、悪魔が語ることです。そうやって、いつまでも罪を神から隠すようにそそのかすのです。そうではありません。神は赦すために待っておられますが、神のところに来ないのが問題なのです。そのために、神に自分を知っていただき、神が自分を知っておられるように、自分をわきまえ知ることが必要なのです。

3B 御前に大胆に立つ自分

そうしている中で、自分は安心することができます。神の裁きの日があっても、自分は守られていることを十分に知ります。自分にたとえ疑いや責めが心にあっても、そうなのです。「Iヨハ 3:19-21 そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安らかでいられます。20 たとえ自分の心が責めたとしても、安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。21 愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。」神の前に大胆であることができます。

どうか、主に知っていただきましょう。自分に傷付いた道がないか、調べていただきましょう。そうすることで、初めて自分をわきまえることができます。主の正しいことばによって、聖霊によって示していただきましょう。(詩篇 19:7-9 参照)主と真実な交わりをすることができるようにするために。